

# 病害虫発生予察情報(4月予報)

令和8年3月25日  
静岡県病害虫防除所長

## 1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (4月の県平均平年値)	予報の根拠
温州みかん	そうか病	発生量：並	3月上旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (＋)
	ミカンハダニ	発生量：多 (寄生葉率 7.3%)	3月上旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (－)
かんきつ	かいよう病	発生量(中晩柑)：並 (中晩柑発病度(葉) 0.8) 発生量(温州みかん)：多 (温州みかん発病度(葉) 0.2)	3月上旬発生量 (中晩柑)：少 (－) (温州みかん)：並 (±) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (＋)
果樹全般	果樹カメムシ類	発生量：少	昨年予察灯誘殺数：少 (－) 昨年フェロモントラップ誘殺数：少 (－) 越冬量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋)
茶	カンザワハダニ	発生量：やや多 (摘採面寄生葉率 2.7%)	3月上中旬発生量：並 (±) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (±)
	チャハマキ	発生量：やや少 (幼虫数 0.08 頭/1.25m <sup>2</sup> )	3月上中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (±)
	チャノコカクモン ハマキ	発生量：やや少 (幼虫数 0.1 頭/1.25m <sup>2</sup> )	3月上中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (±)
トマト	灰色かび病	発生量：やや少	3月中旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (＋)
	葉かび病・ すすかび病	発生量：やや少	3月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (＋)
	黄化葉巻病	発生量：やや少	3月中旬発生量：少 (－) コナジラミ類発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋)
	コナジラミ類	発生量：やや少	3月中旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋)

作物名	病害虫名	予報 (4月の県平均平年値)	予報の根拠
いちご	灰色かび病	発生量：並	3月上旬発生量：少 (－) 気象予報：気温：高い (＋) 降水量：並か多い (＋)
	うどんこ病	発生量：多	3月上旬発生量：多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋)
	炭疽病	発生量：やや少	3月上旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い (＋)
	アザミウマ類	発生量：やや多 ただし、中部・中遠：多	3月上旬発生量：やや少 (－) ただし、中部・中遠：多 (＋) 病害虫防除員報告：やや多～多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋)
	アブラムシ類	発生量：やや少	3月上旬発生量：少(発生なし) (－) 気象予報：気温：高い (＋)
	ハダニ類	発生量：多	3月上旬発生量：やや多 (＋) ただし、東部・中遠：多 (＋) 病害虫防除員報告：やや多～多 (＋) 気象予報：気温：高い (＋)

#### 表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県過去の10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県過去の10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

静岡県病害虫防除所 HP



静岡県病害虫防除所 HP

<https://www.pref.shizuoka.jp/sangyo/shigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>

## 2 予報の根拠と防除対策

### 【温州みかん】

#### ●そうか病

##### 予報の根拠

- ・ 3月上旬の巡回調査では、平均発病度は0.03（平年0.05）と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する。

##### 防除対策

- ・ 被害のある夏秋梢は伝染源となるため除去する。また、前年に多発したほ場は伝染源を翌年に持ち越しやすいので発生に注意する。
- ・ 発芽期以降、越冬病斑から新葉へ降雨のたびに伝染する。新葉の病斑から幼果に二次伝染するため、4月（展葉期）、5月下旬（落弁直後）、6月下旬（幼果期）に薬剤防除を行う。
- ・ 苗、若木での発生が多い病害であるため、新植や改植をしたほ場では発生に注意する。

#### ●ミカンハダニ

##### 予報の根拠

- ・ 3月上旬の巡回調査では、平均寄生葉率は6.8%（平年4.0%）と平年より多かった。地域別では、東部で0.6%（平年1.0%）、中部で8.6%（平年5.6%）、西部で11.3%（平年5.3%）と中部及び西部での発生が多かった。
- ・ 1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

##### 防除対策

- ・ 着花前のこの時期は果実への実害は生じない。ただし、葉に多発すると旧葉の落下を助長することもあるため、注意する。
- ・ マシン油乳剤を散布する場合、散布直後の降雨で防除効果が低下することから、晴天が数日続くと見込まれる際に防除を実施する。

### 【かんきつ】

#### ●かいよう病

##### 予報の根拠

- ・ 3月上旬の巡回調査では、中晩柑類の葉での平均発病度は0.5（平年0.8）と平年より少なかった。温州みかんの葉での平均発病度は0.1（平年0.1）と平年並だった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する。

##### 防除対策

- ・ 被害のある夏秋梢は、重要な伝染源となるので早急に除去する。
- ・ 中晩柑類では、発芽前、5月上旬及び下旬、6月中下旬（梅雨期）に薬剤防除を行う。温州みかんでも、昨年または現時点で本病の発生が見られたほ場では、中晩柑類に準じた防除を行う。ただし、薬害が出るため発芽後～新梢伸長期は銅剤の散布を避けた方がよい。
- ・ 風ずれなどの傷口から病原菌が容易に侵入するため、防風垣、防風網の整備を行い防風対策に努める。

## 【果樹全般】

### ●果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

#### 予報の根拠

- ・令和7年8～10月の予察灯（県内3か所）及びフェロモントラップ（県内6か所）における果樹カメムシ類（以下、カメムシ類）の合計誘殺数は、いずれも平年より少なかった。
- ・本年2月の越冬量調査（県内20地点）において、チャバネアオカメムシ越冬量／落葉1㎡は、県平均0.2頭（平年1.2頭）と平年より少なかった。
- ・地域別でも、東部0.5頭（平年1.3頭）、中部0頭（平年1.3頭）、西部0.1頭（平年1.1頭）と、いずれの地域も平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本虫の発生をやや助長する。

#### 防除対策

- ・本虫の越冬量が少なくても、一部園地ではカメムシが飛来することもあるため、地域の予察灯やフェロモントラップにおける本虫の発生状況に注意する。
- ・静岡県病害虫防除所ホームページ「[害虫誘殺グラフ](#)」では、本虫に関する各種情報（予察灯及びフェロモントラップにおける発生状況、ヒノキ球果の着果量や球果における寄生数、球果での吸汁痕数、果樹園への秋季以降の飛来予測日等）を随時提供しているので参照する。

## 【茶】

### <生育の概況>

3/17時点での一番茶芽の生育は、茶業研究センター（菊川市倉沢）内の作況園（やぶきた）で平年並に推移している。

### ●カンザワハダニ

#### 予報の根拠

- ・3月上中旬の巡回調査では、樹冠面（摘採面）での寄生葉率が0.3%（平年1.1%）と平年より少なかったものの、裾部での寄生葉率が1.8%（平年1.5%）と平年よりやや多かった。
- ・防除員からは、平年並の回答が多かったが、一部のほ場で発生が多い報告があった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

#### 防除対策

- ・樹冠面の葉に寄生が見られる茶園では早期に防除を行う。その際、葉裏に薬液が届くように散布する。
- ・凍霜害等を受けた茶園では、被害を受けなかった新芽にハダニが集まり集中加害することがあるので、防霜対策を万全にする。
- ・新芽がハダニの被害を受けた場合は、薬剤の摘採前日数に注意して直ちに防除を行う。

### ●チャハマキ・チャノコカクモンハマキ

#### 予報の根拠

- ・3月上中旬の巡回調査では、チャハマキの越冬幼虫数は0.08頭／1.25㎡（平年0.31頭／1.25㎡）、チャノコカクモンハマキの越冬幼虫数は0.02頭／1.25㎡（平年0.28頭／1.25㎡）と両種とも平年より少なかった。

- ・1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年より高いため、両種の発生をやや助長する。

#### 防除対策

- ・越冬幼虫による被害が確認された茶園では、地域の防除規制に注意して、摘採後速やかに薬剤防除を実施する。

### <その他病害虫>

#### ●褐色円星病（緑斑症）

##### 防除対策

- ・3月上中旬の巡回調査では、平均発病葉率は10.2%（平年19.4%）と平年より少なかった。
- ・本病は、多発すると一番茶萌芽期から生育期に下葉が落葉し、品質・収量への被害が大きくなる。薬剤による防除適期は夏期以降となるが、被害は一番茶生育期に顕著となるため、被害が大きかった茶園では、この時期に発生状況を確認しておき、夏～秋期に防除を実施する。

#### ●マダラカサハラハムシ

##### 防除対策

- ・近年、葉を食害される被害が発生した茶園が増加している。これらの茶園では一番茶芽に越冬成虫による被害が発生するおそれがあるため、一番茶生育期に薬剤防除を行う。なお、各地区の防除規制や摘採前日数に注意する。

### 【トマト】

#### <生育の概況>

生育は平年並～やや早い。

#### ●灰色かび病

##### 予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年発病株率10.1%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か高いため、発生をやや助長する（本病の生育適温は18～23℃程度であり、特に多湿条件下で発生が多くなる）。

##### 防除対策

- ・株の繁茂やハウス内湿度の上昇により発生が増加するので、不要な下葉を除去するとともに、日中の換気を早めに行い、施設内の除湿に努める。
- ・発病した果実や茎葉は伝染源となるため、速やかに取り除き、ほ場外に持ち出して処分する。
- ・予防に重点をおいた薬剤散布を行う。ただし耐性菌の発生を防ぐため、作用機構の異なる剤をローテーションで使用する。

#### ●葉かび病・すすかび病

##### 予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、本病の平均発病株率2.1%（平年5.8%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か高いため、発生をやや助長する（本病の生育適温は、葉かび病20～25℃、すすかび病27℃程度と比較的高温を好み、多湿条件下で発生が多くなる）。

## 防除対策

- ・多湿にならないように換気につとめ、過度のかん水を避ける。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。
- ・本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤をローテーションする。
- ・葉かび病については、抵抗性品種（Cf-9）を侵すレース2.9の発生が県内で確認されている。抵抗性品種を栽培しているほ場でも薬剤の予防散布を行い、発生に注意する。

## ●黄化葉巻病

### 予報の根拠

- ・3月中旬の巡回調査では、黄化葉巻病の平均発病株率は0.1%（平年1.7%）と平年より少なかった。
- ・コナジラミ類の平均寄生株率は6.4%（平年9.8%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、媒介虫であるタバココナジラミの増殖を助長する。このため、本病の発生も助長される。

### 防除対策

- ・本病はタバココナジラミによって媒介されるため、タバココナジラミの防除を徹底する。防除対策については、コナジラミ類の項を参照すること。
- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。
- ・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・収穫残さは本病の伝染源や媒介虫の発生源となる。そのため、栽培終了後は施設内を蒸しこみ、地際を切断するなどして植物体を完全に枯死させる。また黄色粘着板を設置し、本虫が誘殺されないことを確認してから施設外へ持ち出す。
- ・多発ほ場においては、耐病性品種の利用を検討する。なお、耐病性品種でも感染し、ウイルス密度が高まると発病するため、タバココナジラミの防除を徹底すること。

## ●コナジラミ類

### 予報の根拠

- ・コナジラミ類の平均寄生株率は6.4%（平年9.8%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本虫の発生を助長する。

### 防除対策

- ・施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。
- ・今後、気温が上昇しタバココナジラミの発生に適した条件となる。成虫の新芽や葉裏への寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。

## 【いちご】

### <生育の概況>

病害虫防除員からの報告によると、生育はほぼ平年並。

## ●灰色かび病

### 予報の根拠

- ・ 3月上旬の巡回調査では、平均発病株率は0.1%(平年2.2%)と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する。

### 防除対策

- ・ 本病は気温が20℃前後、多湿条件下で多発生するため、施設内の多湿、植物体の結露は、本病の発生を著しく助長する。循環扇や暖房機の利用、換気、かん水量の調整等で湿度を管理し、耕種的な対策を行う。
- ・ 曇雨天が続く場合は、施設内が多湿となる薬液散布は避け、くん煙剤を利用した防除を行う。
- ・ 株が過繁茂となると発生が助長されるため、下葉や不要な果梗枝の除去を適切に行う。発病した果実や茎葉は有力な伝染源となるため速やかに除去し、ほ場外で処分する。
- ・ 発病前から定期的に予防散布を行う。薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

## ●うどんこ病

### 予報の根拠

- ・ 3月上旬の巡回調査では、平均発病株率は1.9%(平年0.7%)と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

### 防除対策

- ・ 胞子の発芽適温は20℃前後であり、施設内は本病の発生に好適な環境となるため、予防に努める。
- ・ 株が過繁茂となると発生が助長されるため、下葉除去を適切に行う。
- ・ 発病した果実や茎葉は有力な伝染源となるため、速やかに除去し、ハウス内に放置しない。
- ・ 多発生すると防除が困難であるため、初期発生に注意し、発病が確認されたら速やかに防除を行う。
- ・ 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ・ 発生状況及び防除対策については、[「技術情報第5号\(いちご うどんこ病\)」](#)も参照する。

## ●炭疽病

### 予報の根拠

- ・ 3月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった(平年発病株率1.3%)。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

### 防除対策

- ・ 本病の生育適温は28℃前後であり、高温・多湿条件下で発生しやすい。
- ・ 気温の上昇に伴い病徴が再び進展するため、本ほでの新たな発病に注意する。
- ・ 発病株から周囲へと伝染するため、ほ場の見回りを徹底し、発病株や発病が疑われる株の早期発見に努める。
- ・ 発病株は培土も含めて抜き取り、ほ場外へ出す。放置残さは伝染源となるため、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処理を行ってから処分する。
- ・ 本病原菌は水滴の飛散等によって伝染する。薬剤散布も伝染を助長する可能性があるため、散布前にはほ場の見回りと発病株の抜き取りを徹底し、発病株への散布は行わない。

- ・薬剤感受性の低下が疑われる剤（MBC 殺菌剤（FRAC:1）、QoI 殺菌剤（FRAC:11））の散布は避け、薬剤耐性リスクの低い保護殺菌剤（FRAC:M1~11）を中心に使用する。
- ・本病発生ほ場の栽培株は潜在感染している恐れがあるため、健全に見えても親株に使用しない。
- ・本病発生ほ場では、栽培終了後の土壌や資材の消毒を徹底する。

## ●アザミウマ類

### 予報の根拠

- ・3月上旬の巡回調査では、平均寄生株率は8.3%（平年11.1%）と平年よりやや少なかった。ただし、地域別では、東部で0.4%（平年8.5%）、中部で12.6%（平年6.1%）、中遠で11.6%（平年8.5%）と中部及び中遠での発生が平年より多かった。
- ・いちご病害虫防除員6名からの報告によると、本種の発生について2名が「多い」、1名が「やや多い」と回答した。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

### 防除対策

- ・気温が高くなると本虫の施設内への飛び込みが増えるため、発生に注意する。
- ・本虫は花を好んで寄生する。花における発生状況をよく観察し、少発生のうちに防除する。また、必要のない花は摘み取った後、ほ場外に持ち出し、ビニール袋で密閉するなどして適切に処分する。
- ・施設内外の雑草や花き類は、本虫の発生源となるため開花前に除去する。なお、開花後の雑草等の除去は、本虫の飛来を助長するため注意する。
- ・天敵製剤を利用する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。
- ・栽培終了後は、施設を密閉するとともに蒸し込み処理を10日以上行い、残存虫を死滅させる。
- ・発生状況及び防除対策については、[「技術情報第6号（いちご アザミウマ類）」](#)も参照する。

## ●アブラムシ類

### 予報の根拠

- ・3月上旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生株率2.3%）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生をやや助長する。

### 防除対策

- ・新葉等における寄生状況を観察し、初期防除に努める。
- ・天敵製剤を利用する場合は、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

## ●ハダニ類

### 予報の根拠

- ・3月上旬の巡回調査では、平均寄生株率は15.5%（平年12.9%）と平年よりやや多かった。ただし、地域別では、東部で8.6%（平年5.4%）、中部で6.2%（平年22.6%）、中遠で31.6%（平年10.8%）と東部及び中遠での発生が平年より多かった。
- ・いちご病害虫防除員6名からの報告によると、本種の発生について1名が「多い」、3名が「やや多い」と回答した。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いため、本種の発生を助長する。

## 防除対策

- ・寄生が認められた場合は、少発生のうちに防除する。
- ・ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、天敵や気門封鎖剤を利用する。なお、気門封鎖剤の多くは卵への効果が低く残効性が期待できないため、5日間隔程度で連続散布する。
- ・天敵製剤を利用する場合は、ハダニ類及び天敵の発生状況をよく観察する。ハダニ類の発生が多い場合には、天敵に対して影響の小さい薬剤を選択して防除する。

## 【稲】

### <その他病害虫>

#### ●いもち病(苗いもち)、ばか苗病、もみ枯細菌病、苗立枯病、イネシンガレセンチュウ

##### 防除対策

種子消毒（作業を省かず、以下の点に留意して行う。）

- ・自家採種の種もみは塩水選を必ず行う。
- ・「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準」に掲載の種子消毒法の手順を守り実施する。
- ・厚まきは発病を助長するため、適正な種量を守る。

##### 育苗管理

- ・出芽期は30℃以上、緑化期は25℃以上の高温とならないよう温度管理に注意する。
- ・他県ではいもち病の QoI 剤耐性菌の発生が問題となっている（本県での発生は確認されていない）。耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する。詳細は日本植物病理学会殺菌剤耐性菌研究会ホームページの「殺菌剤使用ガイドライン」(<http://www.taiseikin.jp/guidelines/>) を参照。

#### ●縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

##### 防除対策

- ・常発地では媒介虫となるヒメトビウンカの箱施用剤による防除を徹底する。

#### ●トビイロウンカ

##### 防除対策

- ・本虫の日本での発生量は年によって大きく異なり、海外からの飛来時期、量、回数等に影響される。このため、本虫に効果の高い薬剤を含む育苗箱施用剤による予防防除を徹底する。なお、本虫はイミダクロプリド（アドマイヤー等）に対する感受性低下が報告されているため、本剤が含まれている育苗箱施用剤はトビイロウンカ対策に用いないよう注意する。

#### ●斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ等）

##### 防除対策

- ・主要種のアカスジカスミカメは雑草に産み付けられた卵で越冬し、春に孵化する。孵化直後は、水田周辺のイネ科雑草（スズメノテッポウ、セトガヤ、早生型チガヤ）が寄主植物となることから、4月中に除草すると効果的である。ただし、成虫の行動範囲は最大で半径 300m 程度と広く、個々の水田周辺を除草するだけでは十分な防除効果が得られない場合もあるため、地域ぐるみで除草することが重要である。

## ●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

### 防除対策

- ・ 県内全域で分布が拡大している。昨年の7～9月に水田内や水路で赤橙色の卵塊が見られた地域では、水田内で越冬している可能性がある。
- ・ 周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬するので、水路から泥を上げて貝を破碎する。なお、スクミリンゴガイには寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめること。

## 【小麦】

### ＜その他病害虫＞

#### ●赤かび病

##### 防除対策

- ・ 4月に発生が少なくても、5月に多発することがあるので予防散布に努める。特に出穂期から乳熟期にかけて、気温が高く降雨が続くような場合は注意する。
- ・ 防除適期は開花期前後となる。一回目の薬剤散布を穂揃期から5日目までに行い、さらにその5～7日後に二回目の薬剤散布を実施する。

#### ●うどんこ病・赤さび病

- ・ 昨年5月中旬の巡回調査では、うどんこ病の平均発病株率は12.2%（平年20.2%）と平年より少なかった。また、赤さび病の平均発病株率も1.8%（平年15.1%）と平年より少なかった。
- ・ 本県の奨励品種である「きぬあかり」はうどんこ病にやや弱く「イワイノダイチ」、「農林61号」より赤さび病も発生しやすい。
- ・ うどんこ病の第一次伝染源は前年の被害残渣で越冬した病原菌であり、赤さび病の第一次伝染源はほ場に落下した穀粒で越冬した病原菌である。よって、前年多発したほ場では発生に注意する。
- ・ 止葉の一枚下葉の展開期以降～止葉抽出期に薬剤の予防散布を行う。
- ・ 窒素肥料の過多を避ける。

### 3 季節予報

#### ● 1か月予報 (東海地方 令和8年3月19日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 3月21日から4月20日

【予想される向こう1か月の天候】

特に注意を要する事項		向こう1か月の降水量は平年並か多い見込みですが、これまでの少雨の影響が残る可能性があります。
向こう1か月	天候	天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率80%です。
	降水量	降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。
	日照時間	日照時間は、少ない確率50%です。
1週目	気温	1週目は、高い確率80%です。
2週目	気温	2週目は、高い確率80%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、高い確率70%です。

【確率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	10	80
1か月	降水量	20	40	40
1か月	日照時間	50	30	20
1週目	気温	10	10	80
2週目	気温	10	10	80
3～4週目	気温	10	20	70

【予報の対象期間】

1か月	:	3月21日(土)～	4月20日(月)
1週目	:	3月21日(土)～	3月27日(金)
2週目	:	3月28日(土)～	4月3日(金)
3～4週目	:	4月4日(土)～	4月17日(金)

#### ※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1  
 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780  
 URL <https://www.pref.shizuoka.jp/sangyoshigoto/norinjimusho/1058658/boujo/index.html>